

「子育て支援」各地の取り組み

奈良県天理市

「子育てしやすい町 天理」をめざして

天理市児童福祉課主幹 田中 由美子

子育て支援との出会いから

2000年(H12)4月、私は公立保育所勤務から天理市役所へ、子育て支援の取組みを目的に転勤の辞令を頂きました。当時の私は、子育て支援の取組みといっても、保育所の園庭開放と公立保育所5か所の主任・家庭支援保育士による2歳児の親子教室しか知らず、「私一人で何をしたらいいの?」という大きな不安で一杯でした。

転勤して間もなく、当時の保育所指導主事より2か所の先進地を紹介して頂き、不安いっぱいでも視察に行きました。何をどう見て質問していいのやら、そんな私の様子を見かねて、それなら・・・とKKI(本会)を紹介して下さったのが橋本真紀先生(関西学院大学准教授、元本会運営委員)でした。

子育てが危ない?

7月のKKI第11回フォーラムに参加した時のことです。全国から泊りがけでの参加者が多数おられることにびっくり。そして汐見稔幸先生のお話には、保育士としての私の考えは根底から音を立ててガラガラと崩れ落ちるほどの衝撃を感じると共に、私がこれからめざす子育て支援の取組みの原点はこれだ!!と確信を持たせていただくものとなりました。保育士になって20数年、一人ひとりの子どもを大切にする保育を求め、「家庭と保育所が共に子育てして行きましょう」と言葉では言いつつ「お家でもこうしてあげて下さいね・・・」と言ってきた私。

汐見先生のお話を聞いて、子育て支援とは決して保護者への指導ではなく、『子育て中のお母さんたちを支援すること』、子どもたちが笑顔で生活できる為には、その後ろにいるお母さんたちをまず笑顔にし、子育てに前向きになれるよう、いかに支援していくか・・・という事でした。12年前の当時でさえ、『子育てが危ない!』とまでお話され、在宅で一人ぼっちで子育てをしているお母さんたちをいかに集団子育てに誘い出せるか、子育てサークルの重要性も教えて頂きました。

「『昔の母親は、子育てがちゃんとできたが、今の若い母親たちは躰もできない!』とよく言われるが、昔も若い母親が1人で子育てできたのではない。子育てを手伝ってくれる大人たちが周りにいっぱいいた。現代は核家族化が進み、なおかつ地域のつながりが希薄になっている中、子育ては母親のみの肩にのしかかるようになってしまった。若い初心者マークのついた母親が、悩まないはずはない。昔を懐かしみ取り戻そうというのではなく、今の時代に合った子育ての輪を作っていくことが大事。母親同士が友だちになり、悩みを相談し合



出前保育

うことができる。そんな場を提供していくことが大事だ」と・・・。

子育て支援事業のスタート

*子育てマップの作成(2000年5月～)

それまで5か所の保育所で共同で作られていた子育てマップの作成を、子育て支援担当として任せられました。天理市内公立・私立保育所(園)に協力をお願いし、内容の充実に努めました。より多くの親子が園庭開放を利用し、近くにある安心できる子育ての場として、また相談センター的な役割としても保育所を利用してもらえるようにと、4000枚の印刷と保健センターや、スーパー、病院など親子連れが来る所への配布を実施しました。

*子育て教室・0歳児・1歳児・2歳児のスタート

1クール6回～8回という期間の中で、同じ年齢の子どもを持つ母親が毎週顔を合わせ、自然にお互いの悩みを話し合い子育て仲間が増え、サークル活動へとつながっていくグループもできました。毎日子どもと二人きりでいると、些細な事でも「これでいいの?」と不安になり、どうしていいかわからなくなって、「それでいいのよ!」と相づちを打ってくれる人がほしくなる。しかし、なぜか祖父母や姑には「『完璧な母親』と見られたい」、「手伝ってほしくない」という思いを持っている人も少なくなく、様々な相談が飛び込んでくるようになりました。

*集いの広場の開始(2000年)

10月、保健センターの地下の位置に、子育てサロンの部屋「すこやかホール」が誕生しました。ある日「ちょっとでいいから、眠ってもいいですか?」と駆け込んでこられたお母さん。本当に子育てでクタクタになって、母親一人で必死で頑張ってるんだな—という瞬間に出会い、ますます子育て支援の重要性を感じました。当初は保育所の家庭支援保育士に手伝ってもらい運営していた教室やサロンも、事業の充実に伴い2001年度より

母親が自ら学べる機会や親どうしの出会いの大切さを実感

担当保育士を1名増員して頂き、より活動を広げることとなりました。こうした若い母親たちの思いや願いをできるだけ受け止め、代弁し、子育てしやすい町：天理、を作っていくことが私たち子育て支援担当の役割であるとも思いました。

*子育て支援情報紙「のびのび通信」

発行に向けて(2001年1月から準備)

2000年6月、行政内では保健センター・教育委員会・児童福祉課を中心に、関係課8課が集まって子育て支援事業の検討を目的に、子育て支援連絡調整会議が立ち上がりました。児童福祉課が事務局を担当する事になり、こうした子育ての実態を多く語れる機会を得ました。当時担当者以外の上司は全て男性で、私が話す中身をなかなか理解しては頂けませんでした。しかしせつかく子育て支援事業を充実させようとしているのなら、もっと市民にわかりやすい情報提供のあり方が必要だと賛同頂き、子育て支援情報紙「のびのび通信」の発行が実現しました。(2001年5月1日号より)遊び場紹介を始め・講座・健診・図書館や文化センター・児童館の案内・悩みの相談窓口や家庭児童相談室の紹介・トピックなどA4、8ページによりタイムリーな子育て情報をぎっしりと詰めて、年間3回広報誌に折込で全戸に配布してきました。

発行して2年目でした。ある祖父母が、「私の娘がどうも子どもに虐待をしているようなんです!」と「のびのび通信」を片手に、児童福祉課に相談に来られました。早速家庭児童相談室と連携を取り、当時の虐待防止ネットワークのケース会議を通じて母親支援が始まりました。母親を子育て教室に誘い話を聞いていく中、母親自身の本音「親に甘えなかった」という事がわかり、「今からでも甘えたらいいやん!」と、声をかけ母親の背中を押す事により、母親自身から祖父母の元に飛び込む事ができました。母親からは、「少しの間、この子を見てもらって買い物に行ったり、私も自由な時間が持てるようになりました」と笑顔で話され、心配されていた祖父母と共に私たちもとても嬉しかったことを覚えています。

*子育て中のお母さんの笑顔を求めて

子育てには母親の笑顔が不可欠という思いで、その後は様々な子育て支援事業を立ち上げ取り組んできました。

○子育てサポート事業・・・サポーターの養成やサポーターに手伝ってもらっての

- ・出前保育・親子で楽しむ音楽会
- ・子育てサポートクラブの運営。
- ・保育所と連携した天理っこ広場・託児付きのNPプログラム(1998年より毎年1回実施)

○保健センターとの連携から、『子育てワンポイントアドバイスと遊びの紹介』

10か月児健診時の待ち時間を利用して、人見知



りの大切さや、母親からの言葉かけ、母子の愛着関係の大切さを伝えています。

*BPプログラムとの出会い

何時の頃からか保健センターの4か月児健診で、もうすでに子育てが大変な状況の家庭があることを知りました。「こんにちは赤ちゃん訪問事業」は実施しているものの、母親自身が自ら学べる機会、子育てに自信を持ってもらえる機会、何かいい支援方法はないか?と探していたところ、KKIの取組みでBPプログラムに出会いました。

私自身は、NPファシリテーターとして初回のNPを実施し、母親たちに心からの仲間ができて、その後お互いに支援し合っている事、中には自ら「相談サロン」を立ち上げ定期的に集まる場所を提供している方もいて、こうした出会いの大切さを実感していました。しかし私自身は、実施の翌年から子育て支援担当をはずれ管理職になり、子育て現場から離れつつありました。少々寂しい思いをしていたところ、「これだ!!」と思えるプログラムに再度出あわせて頂いたのです。

現在は、要保護児童対策地域協議会の事務局を担当する日々で、様々な子育て模様を見聞きし『何でこうなってしまったのか』『どうしてこうなる前に誰かが支援できなかったのか』と、電話での通報を受けるたびに胸が痛くなる思いで一杯です。

「生後2か月からの赤ちゃんをもつ保護者が、思春期に花開く子育てをめざし、子育てのあり方を参加者同士で学んでいく」このプログラムを2012年度は6回実施する予定です。多くの母親たちにBPを経験してもらう事で「親子の絆作り」「子どもの心の安定根を育む大切さ」「母親自身の精神的なバランスを保つ事」などを学ぶ事により、子どもたちに安心・安全な子育てが営まれることを期待して、これからも私たちにできる支援を精一杯取り組みたいと思っています。

最後に、私のこれまでの子育て支援の取組みは、KKIとの出会いがあってこそ実施できたと言っても過言ではありません。そして私にとって道しるべとなっていたいただいたこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。これからもよろしくお願ひいたします。